

ハウス・オブ・ザ・イヤー・イン・エナジー 2013・スペックの展示場 始良市松原町 公開中!



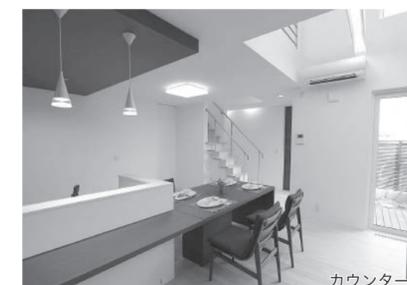
本展示場は【ハウス・オブ・ザ・イヤー・イン・エナジー 2013】大賞受賞スペックを参考にして造った展示場です。暖冷房はエアコンだけという最もシンプルな構成で住宅性能の良さだけで、省エネルギーを目指した展示場です。これから逼迫が予測されるエネルギー事情を見据えた高性能展示場です。平屋の住み心地を是非ご体感ください。 ※見学ご希望の際は前日までにご連絡ください。



ハウス・オブ・ザ・イヤー・イン・エナジー 2013・スペックの展示場 川内展示場 公開中!



本展示場は【ハウス・オブ・ザ・イヤー・イン・エナジー 2013】大賞受賞のスペック通りに造った展示場です。エアコン一台程度で冬も夏も快適な暖冷房を可能とした省エネルギー、超高性能住宅です。鹿児島県に相応しい期間蒸暑地域対応型住宅として、全国的に評価された工法です。設備は少ないけれど少ないほど、更新に必要な資金は少なくなります。



住宅に関する資料等もフリーダイヤルにてご請求下さい。資料等をお送り致します。

0120-079-089

ひこうき雲

高レベル廃棄物は、300mの地下に、10万年間の貯蔵が必要だ。

資源小国日本の原発は、一定の成果を称えつつも、代替エネルギーにバトンタッチの時。

原発、廃棄物50m地下に10万年間貯蔵!

原発の廃棄物は10万年の保管が必要という現実!

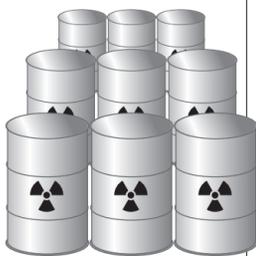
皆さんは、想像できるでしょうか? 10万年という途方もなく長い時間、この10万年という時間が大きな課題となっています。「高レベル放射能廃棄物」の処分基準に先駆けて「低レベル放射性廃棄物」の処分基準を原子力規制委員会が、本年度中にまとめることになっています。その新聞記事に、10万年の保管期間という文字を見つけ、愕然としました。「高レベル放射性廃棄物」は、人が近づけば20秒で死ぬ程、強い放射線を安全レベルになるまで、10万年という途方もない時間、保管を要すると言っているのです。今までは、地下深くに埋めて人間社会から隔離する地層処分の方針となってきました。しかし、東日本大震災は原発事故のリスクに加え、地層処分にも大きなリスクがあることを浮かび上がらせた。現在、高レベル放射性廃棄物の多くは青森県六ヶ所村に集め

られ、貯蔵方針や最終処分場が決まるまで一時保管しています。すでに六ヶ所村には、収納可能量とされる量の8倍もの核廃棄物が集積されています。

発電に使われた核燃料の1億倍以上に増える放射能。

放射性廃棄物は原発で使い終わった設備品や使用済み核燃料から生まれます。日本では、MOX燃料という、使用済み核燃料を再び燃料として使用する高速増殖炉「もんじゅ」が開発されていますが、現在は稼働しておらず、青森県大間にも「もんじゅ」に変わる新型原子炉が建設中です。燃料リサイクルが完成しても、燃料の再処理の課程が極めて強い放射能を持つ廃液が出てしまいます。この廃液が高温で溶かしたガラスを混ぜガラス固化体にしてステンレス製の容器で保管します。発電に使われた核燃料の放射能は使用前の1億倍以上に増え、ガラスを固化体にしても、人が近づけば20秒で死亡するほど危険です。

発行所 禁松 松下 孝建設
発行人 松下 孝行
編集責任 齋藤 恭誠
■本社
〒891-0108
鹿児島市中山1丁目14-29
TEL 099-267-7594
0120-079-089



難だ」と結論づけました。
日本学術会議は、地層処分の白紙撤回を提言。

原料のウラン鉱石と同レベルまで放射能が低下するには、10万年もの歳月を必要とします。そのため日本では、地下300メートルより深い地層に埋め込む、地層処分という方法が国の方針となって来ました。地層処分のための研究が、岐阜県瑞浪市で進められています。高レベル放射性廃棄物は、鋼鉄製の容器などで覆われ岩盤の中に埋められます。年月とともに容器の腐食が進みますが漏れ出すまで1000年は耐えられるとされています。その後、廃棄物は地下水によって運ばれる可能性が低いです。しかし、岩盤の中の流れは緩やかなため地表に到達するには、数万年以降でそのころには放射能は安全なレベルに下がっていると試算してきました。鋼鉄の容器による人工のバリアと岩盤という天然のバリア。この2つのバリアによって、10万年の安全を確保しようというのです。ところが、東日本大震災後、「日本学術会議」は地層処分を行うのは地震の多い日本では困

地層処分からカナダ方式の暫定保管という考え方。

■放射性廃棄物の種類と処分方法 (旧案)

表-1	廃棄物の例	処分の例
高レベル放射性廃棄物	使用済み核燃料から出る廃液	ガラスで固めて300m以上深くに埋める
	L1 原子炉内の部品	50m以上深くに埋設し構造物で覆う
	L2 フィルター消耗品	地下10~20mに埋設し構造物で覆う
低レベル放射性廃棄物	L3 コンクリート	浅い地下にそのまま埋設
	金属	

「鋼鉄の容器の腐食で、汚染物質が地下水に流れ出しても、岩盤の中の流れは緩やかなため地表に到達するには、数万年以降で放射能は安全なレベルに下がっている。」を根拠にしてきましたが、この考え方は撤回された「日本学術会議」の提言は暫定保管に変わっています。すぐに地層処分に踏み切らずしばらくの間、人間の目が届く場所で管理するというカナダ方式を参考にしています。最初の60年は原発敷地内、または浅い地下の貯蔵施設で管理法の開発と、その賛否などを問う国民的な議論を行おうという

真ん中に、毎秒4リットルの大量の地下水が湧き出て、止まらなくなったのです。「活断層がずれたことによって地下水の道に大きな力加わり水を地表まで一気に押し上げた」と考えられています。大きな地震が起きると岩盤という天然のバリアが機能しなくなる可能性がります。と石橋克彦名誉教授は指摘しています。

原発は、寿命まで使用し延長・新設はしない選択。

方向に変わっています。その後深い地下への地層処分を行うという、方針変更があった場合に備え、2000年には廃棄物を回収できるようにして置くようです。表1は、旧処分方法の概要ですが、これがどの様になるか注目したいものです。日本の場合は、川内の2基の原発のみが稼働している状況です。日本よりも多くの原発が現在も稼働中ですが、「原発を直ちに停止せよ。」という考え方もあるでしょうが、私達は深夜電力など、原発による恩恵も受け続けてきました。資源小国の中で、原発の恩恵は計り知れないものがあります。確かに今回の話題のように廃棄物の処理など、大きな問題もありませんが、安全性を確保して耐用年数分は原発を使い続け、耐用年数後は、順次、代替エネルギーに変えていくという方法もあると思います。太陽光発電や水素発電にシフトしていくなど、様々な方向にソフトランディングさせていくのが、最も良い方法ではないかと思えます。そのために必要なのは、住宅に於けるエネルギーの削減を実現させて行くことです。地球環境を考えた場合、住宅の高性能化は益々、重要なになります。松下孝建設はシンプルなた住宅性能で貢献して参ります。